
ラブカクテルス その27

風 雷人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ラブカクテルス その27

【Nコード】

N0976D

【作者名】

風 雷人

【あらすじ】

今宵は温かいカクテルはいかがですか？ご賞味あれ。

いらっしやいませ。

どうぞこちらへ。

本日はいかがなさいますか？

甘い香りのバイオレットフィズ？

それとも、危険な香りのテキーラサンライズ？

はたまた、大人の香りのマティーニ？

わかりました。本日のスペシャルですね。

少々お待ちください。

本日のカクテルの名前は覗き見でございます。

ごゆっくりどうぞ。

私は結婚した。

ばかりだ。

なのに彼ったら、仕事仕事の毎日で、朝は早いし、夜は遅い。

付き合っていた期間が三年と、ある程度は一緒にいたから、新鮮さはまあ、そんなにないのかも知れない。

それにまあ、ヤルこともそれなりにやってきてはいるので、昔みたいに初夜がどうのつてのものないし、生活のリズムが凄く変わった訳でもない。

しかも私はそれほど料理が得意ではない。

そっか、彼にしてみれば、あまりこの生活は魅力的なものではないのかも知れない。

それならば、料理でも少し勉強するかとテレビを付けるが、再放送のドラマがやっていて、ついつい見ちゃう。

あれ、いつの間にか夕方だ。

やれやれ、今日は冷凍物にして料理の勉強は明日からにするか。
風呂も沸かさない。彼と一緒に入っちゃお。

彼は夜の一時にやっと帰ってきた。

私はテーブルについていた肘を伸ばして、少し不機嫌な顔で彼を迎えた。

彼はかなり疲れた様子で、直ぐに風呂に入って寝ると言って、そそくさと行ってしまった。

テーブルには冷たくなった冷凍物の料理が死骸のように置いてあった。

私は彼を追うように風呂に入って、体を洗ってあげると背中を擦ってあげた。

彼は湯船に入り、大きくため息をついた。

私が湯船と一緒に入ろうとすると彼は立ち上がり、お先と出ていった。

浴室の天井から冷たい雫が私の肩に落ちてきた。

そしてもう一つの雫は私の頬に落ちてきた。

私がパジャマに着替えてベッドに行くと、彼はいびきをかいて寝てしまっていた。

私はリビングに戻り、チュウハイをいつもよりも多めにあおった。
頭がぐるぐる回っている。ぐるぐるぐるぐる。

気が付くと、私は真っ暗な、何か柔らかい、そう、大きい袋の中にいた。

なんなんだココは。

わかった。夢の中か。

私はほつぺたをツネってみたが、夢からは覚めなかった。
いったいどうしたんだろう。どこなんだろう。ここは。

すると、どこからか、ドクドクと何か聞こえてきた。

何の音？

私は何とかココから出ようとしてみたが、スルスルした生地みたいな壁は全然掴めるところがなかった。

私は焦った。

がむしゃらに壁に手を走らせた時、少しの綻びに手が引つかかった。

私は慎重にその部分を手で掴み、引き裂いた。

何とか外が見えるくらいの穴が開いた。

私は慌てて目を近づけてみた。

するとそこには、ヒトヒト。大勢の人々が見えた。

私は拐われたのか？助けを呼ばなければ。

私は必死にその小さい穴から外に向かって叫んだ。

叫んだが、誰も気付いてくれなかった。

私は不安で不安でたまらなかった。

体が震えてきた。

どうしよう。

また、外を覗いて見る。

そうしたら、あることに気付いた。

外に見える風景は見覚えのある、というより、そこは自分が住んでる町の商店街だった。

私はまだ差ほど遠くに来ていないと思い、少し落ち着いて様子をみることにした。

私が見る風景は次第に駅へと入って行った。

凄い人の数だ。

きつと朝のラッシュ時間だろうか。

しかし、私はこんな中で、袋に入られて担がれているのだろうか。

こんな白昼堂々と。

誰も怪しいと思わないのだろうか？

そのうちホームに出て、電車がきた。

私の見ている風景は、満員電車の中へと入って行った。

イタタツ。

私は潰されそうだった。

助けてと叫ぼうにも声なんて出なかった。

く、苦しい。

そのまましばらく電車に揺られていたようだったが、私は気絶寸前だった。

私の見ている風景は、吐き出されるように電車の外に出されたらしく、私は何とか深呼吸をして正気に戻った。

慌てて穴を覗くと、そこも見覚えのある駅だった。

彼が勤めている会社のある駅だった。

私は興味深く、その穴を覗き込んだ。

やがて、その風景は幾つかの通りを曲がり、彼の会社に入って行った。

いったいどういふつもりなのか？

私は、まさか私を捕まえて、彼に脅しをかけたりするのではないかと、良からぬ想像ばかり働かせてしまったのだが、私の見ている風景に、フロントカウンターの女性は、笑顔でこちらに挨拶をしている。

すれ違う人達も、手を挙げて挨拶しているし、頭を下げてくる人もいた。

そして口々に私の新しい名字を言った。

えっ？私？

そんな。私が見えているのか？

いやそんなハズはない。

ってことは。

確かにどこか、上の方で彼の声がする。

まさか、この袋を持っているのは彼？

どうなっているんだろう。

私の想像は振出に戻らないといけないようだった。

私の見ている風景は、そのうちデスクに座ったようで、机の上の様子が見えた。

かなり汚く散らかり、ごちゃごちゃの机の上には、やはり私と彼の名字の書いてあるプレートが見えた。

その横には、私の写真がある。

なんか照れる。

しかし、今はそんな事を気に掛けてる場合ではない。他に何か見えないか。

私は穴をめいっばい広げて外をみた。

するとそこには、なんと、えっ？

大きな手が目の前に出てきた。

そしてその左の薬指には見覚えのある指輪が。

間違いなく彼の手だった。

大変だ。彼ったら大きくなっちゃったんだわ！

いや、待てよ。

周りの人達も大きくなって。えっ？巨人の世界？

いや、落ち着けっ、お、落ち着けっ。

そうだ、違う。私が小さくなったんじゃない？

そうだ。きつとそうだ。よかった。ふー、って、よくないよ！

えっ、私が小さくなった訳？

ありえなくないいいい！

私はなんとなく、ここがどこだかわかった。

彼の上着のポケットの中らしい。

なぜなら、さっき、上からボールペンみたいなものが降ってきてっというか、刺さってきて、危うく串刺しになるところだったからだ。

私は彼の胸であろう、その場所に思いつき蹴りを入れた。

彼は少し小さい声で痛いと言ってポケットに手を当ててきた。

苦しいってば。全く。

帰ったら只じや置かない。覚えてろつ。

私は少しむくれていた。だけど、やがてまた、穴を覗いてみた。彼は手帳を覗いていた。

その中身は真つ暗に見えるくらいの文字の数だった。

しかもその手帳は、前に私が送ったプレゼントの一つだった。

彼はため息をつくと、向かい側に座っている同僚に声を掛けた。

その名前には覚えがあった。よく彼の話しに出てくる名前だ。

確かおつちよこちよいのかわいい後輩。

こんなところで、初めまして。主人がお世話を掛けて、いやいやお世話してる、かな？

でもそんなの聞こえる訳ないか。

彼は今日のスケジュールと、打ち合わせの内容や、注意点なんかを手際よく話し、後輩君に繰り返すように言ったが、後輩君は慌てて自分のメモを読み返し、でも手帳の表紙は反対だった。

確かにおつちよこちよいみたいだわ。

彼もすかさずそれを指摘して笑っていた。

私もクスツと笑った。

そこにまた、少し低い声の貫禄のある声の男性がやってきた。

彼の名前を呼び捨てで呼ぶと、彼はその人の名前の後ろに課長と付けた。これが噂の切者か。

彼はよく、尊敬する上司を課長と付けて呼んでいたし、彼の目標でもあると言っていた。

課長さんは軽く、彼から今日のスケジュールを聞くと、手短で的確なアドバイスを告げて、そそくさと立ち去って行った。

なるほど。彼が惚れるのが判る気がした。

彼は重そうなカバンを持つと、後輩君の肩を叩いて会社を出た。

今日はいい天気だった。彼はこれからどこに行くのだろう。

仕事で向かった先は、お洒落なデザインのビルだった。

彼の仕事は営業だ。

色々なイベントの企画や、手配をする仕事だ。

彼の夢は、会社を大きくして、有名なアーティストのコンサートを手掛けることだそうだ。

でも今は、怪しい宗教団体の催し物や、ネズミコウまがいの商談会、売れない演歌歌手の講演会などが支流らしい。

そして今日は、ネズミさんとの打ち合わせからが、仕事始めらしい。その会長とやらは、いかにも詐欺師ですと、顔に書いてあった。

指輪のセンスも最低だが、それより何よりもあの紫色のスーツとは何だろう。ヒドイ。

その会長はかなり大きな紙を広げて、次の企画の話しを持ちかけて、予算の提示までしてきた。

彼はかなり厳しいと言ったが、嫌ならいいやと、イヤらしい目でツツクのだった。

憎らしい奴。しかし彼は我慢強く交渉し、会社に持ち帰る作戦に出たが、向こうもすかさず、逃すものかと今の約束を迫ってきた。

その時の会長さんの目は、悪あきんどのそれだった。

下心ミエミエの嫌な目は、彼を追い詰めて、今回の企画も頼むよ、の一言で彼は折れたのだった。

散々儲けいるくせに、悪あきんどが！

私はポケットの中で舌を出した。

彼は肩を落としてそのビルを後にした。

次に向かったのは、これまたかなり怪しい寺？というか、会館だった。

かなり豪華な作りで、意味がありそな、なさそな、ありがたいのか、ありがたくないのか、顔の歪んだ仏像がブランド品のコートを着込んで立っていた。

インチキクサイ。

彼は裏に廻り、会館の離れの屋敷に訪ねて行った。

出迎えたのは、高そうなシルクの上下を着たスキンヘッドの、ごつ

いおじさんだった。

おじさんは彼に上がってくるように行って、ノッシノッシと奥へと消えた。

彼は礼儀正しく靴を揃えて置くと、続けて奥へと進んでいった。

おじさんは、見るからに高そうなレザーのソファ―に腰掛けて、葉巻を吸っていた。

彼はカバンから、厚手の封筒を差し出した。

企画書らしかった。

おじさんはそれに目を通すと、ウンウンいいながら、気に入ったといい、書類に判を押した。

それからニンヤリ笑って彼に言った。

ところで、かわいい女の子は揃いそうかい？

なんだ、今度はエロオヤジか。

彼は写真を手渡して、今回の企画のコンパニオンさんです。と言った。

どんな企画だ、これは。

エロオヤジは顔を綻ばせて、よしよしと写真にカジリついていた。どいつもこいつも。

彼はまたため息をついて、その屋敷を後にした。

彼は駅に行き、電車に乗る前に立ち食いソバ屋に入った。

食券の販売機に指を走らせて、天玉の前で迷い、すかさずキツネのボタンを押した。

なんで、天玉にすればいいのに。

それから、そそくさと蕎麦をすすった。

その時電話がなった。

彼が話す様子から、後輩君からしかった。

彼の口調は真面目で、でも冷静だった。

何かトラブルらしかった。

彼は汁を残して電車に飛び乗った。

彼の着いた所は、小さな市民会館だった。

彼が会場に入ってみると、舞台の真ん中で一人の着物を着た男が演歌を歌っていたが、客の入りはすかすかで、会場の空気は寒かった。彼を見つけた後輩君が、息を切らせて走ってきた。

参りました。全然お客様が来ないんです。

彼は見ればわかるよと、頷いた。

後輩君の話では、今日はこの後まだ、二公演あるのに、本人は怒ってもうやめると言ってるらしかった。

なんなんだそれは。逆ギレか？

女の腐ったのが演歌なんて呆れる話だ。

彼は、その回の公演が終わると、楽屋に行つて、その女の腐ったのと話しを始めた。

腐った演歌歌手はかなりムクれていた。

しまいに、いきなり立ち上がつて、帰ると言い出した。

彼たちは慌てて止めたが、後輩君は突き飛ばされて、壁に頭を打つた。それを見た彼は、さすがに怒った。

自分の夢を諦めるなど。

一緒に大きい舞台に立とうつて約束したのはどうする？止めるのか？忘れてる。心に向かつて震わす拳の歌声を。

声の拳で客の心殴つてこい！

それが演歌だろうが！客へのどれくらいは数じゃない。

どれくらい心を殴れるかだ！

腐った演歌歌手は、私は、後輩君は心を殴れた！

すると、彼は腐った演歌歌手の背中を押した。

二回目の公演が始まった。

そしてそこには、まだまだだが、心の拳を持つ演歌歌手がいた。

彼はその後も公演に付き合つて、終わったのは夜の八時だった。

彼は会場を後にしてから、後輩君と会社に帰った。

後輩君は彼に、夢は何かと聞くと彼は、有名なアーティストのコン

サートに私に見に来てもらうことだが、当面の目標はお金が貯まって、時間ができれば、海外旅行でも連れて行きたいと言って、笑った。

彼は会社に戻ると、今朝打ち合わせしたネズミさんの企画の手配と予算プランのための電話を何件もした。

パソコンを打つ手は、ずっと動き通しかった。

そういえば、夕飯は食べていないが大丈夫だろうか？少し心配になった。

その時、例の課長さんが食事に誘いにきたが、彼は妻が待っているんでと、断った。

わ、私はなんだか、涙が出てしまった。

彼は、最終電車に乗り込んだ。

朝と同じラッシュに加えて、ヒドイ酒の匂いだった。

私はその暑さと、匂いで頭がくらくらしだして、グルグル回り始めた。グルグルグルグル。

気が付くと、部屋のダイニングの椅子で寝ていた。

私は夢を見ていたのか？

時計を見ると、かなり遅い時間。

いけない、彼が帰ってくる。

急いで風呂の支度をすると、そこへ彼が帰ってきた。

私は慌てて、先に風呂に入るように言って、夕飯を、冷凍物を使わずに何とか仕上げた。

風呂から出てきた彼にビールを注ぐと、彼は一口飲んで、ぷはーつとやった。

そして大したことのない料理を美味いと食べてくれた。

私はその姿を見ながら、思わず鼻歌を歌った。

それは夢で聞いたあの演歌だった。

彼は驚いた顔をしたが、笑った。

寝る前に、私は気になって確かめてみた。

やはり、上着のポケットには、小さな穴があった。

おしまい。

いかがでしたか？

今日のオススメのカクテルの味は。

またのご来店、心よりお待ちしております。では。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0976d/>

ラブカクテルス その27

2010年11月28日00時27分発行